国家の枠組み超えた外交を

東京外国語大学教授
中嶋 嶺雄

九一年夏、ついにソ連共産党体制が解体し、社会主義はキューバを除けばアジアに残るだけとなりました。いま注目されているのは、アジアの社会主義諸国にいつこうした歴史の波が及ぶかということです。二十世紀が革命の世紀だとすれば、革命の産物である社会主義国家が今世紀の終わりにはなくなるかもしれないわけですから、中国、朝鮮民主主義人民共和国（北朝鮮）、ベトナムの三つの国の、行方は、まさに世界史的な問題だと言っていいでしょう。

逆にこれらの社会主義諸国にしてみれば、歴史の逆流を阻止しようと懸命になっています。当面は一致団結して、体制を強化しようという方向に動いています。このことは、ソ連の保守派クーデター後のこれらの国の動きをみると、よくわかります。

まず、中国と北朝鮮に動きがありました。十月初め、金日成主席が十日間も中国を訪れ、両国は「特別の関係」と表明しました。両国は従来から切っても切れない関係、唇と歯のような関係と言われてきましたが、必ずしもうまくいっていませんでした。しばしば歯が唇をかむことがあったのです。今回も中国は自分のことで手いっぱいで、北朝鮮の面倒はあまりみられないという感じでしたけれども、一部の情報では、中国がある種の軍事援助、経済援助を約束したとも言われています。

中国とベトナムの関係は、中朝関係以上に急ピッチで改善されています。七九年の中越戦争以来、十年以上にわたって悪い関係が続いていたにもかかわらず、九一年夏にはまず捕虜を釈放し、中国共産党からの訪越団が出て、そして中越両国の共同コミュニケが発表されました。近い将来のド・ムオイ書記長の訪中によって、これまでのこじれた中越関係にピリオドが打たれることでしょう。

あわせて中国は、キューバとの関係も改善しようと努めています。ソ連・東欧の波の防止、社会主義の擁護にまさに躍起です。

しかし一方で、中国は改革と開放の政策を進めています。つまり、社会主義国家では許されなかった個人的、金銭的なインセンティブを認める。わかりやすく言うと、お金をもうけてもいいということです。そうした政策で、沿岸地方に経済特別区を設け、外国資本を導入し、中国の安い労働力を提供し、できたものを外国に売って外貨を稼ごうというわけです。これは外貨稼ぎの拠点をつくると同時に、市場経済の防波堤としての一種の〝水際作戦〟でもあるのですが、実際には香港に隣接する経済特別区・深圳をはじめ、完全に香港ドルの支配下に入ってしまっています。

台湾の存在も大きくなっています。台湾は

なかじま　みねお　1936年、長野県生まれ。東京大学大学院社会学研究科国際関係論修士課程修了。オーストラリア国立大学、パリ政治学院各客員教授などを歴任。著書に「現代中国論」「北京烈々」「中国の悲劇」など。

外貨保有高でもつい最近、一時的に日本を抜いて第一位になったほどです。貿易額も伸びて、九一年は千三百数十億ドルの見込みです。また台湾は、西側諸国が天安門以降、中国を制裁していた間、大陸訪問を大幅に許しました。これは中国にはとてもありがたいことでした。外貨が少ないときに、日銭を持って観光客が来る。九〇年だけでも百万人、天安門以降、延べ三百万人ちかい数です。こうした台湾の影響は避けがたいものがあります。これらは「南風」と呼ばれていて、中国社会のなかに広く深く浸透しています。

こうしたことなどを考えますと、ポスト鄧小平の時代になれば、すでに中身の崩れている共産党一党独裁体制を維持し続けることは、難しいのではないかと私は思います。鄧小平の退場が歴史的転換点になるのではないかと考えます。彼がいつ退場するかは神のみぞ知ることですが、八十七歳と高齢ですから、そう遠い将来ではないでしょう。

権力継承が北朝鮮の大問題

そうしたなかで注目されるのは北朝鮮の動向です。私は北朝鮮のほうが中国よりも持ちこたえるのではないかと思います。ひとつには、金日成のほうが鄧小平よりも八歳若い。また中国の場合は、誰もが共産党ではもうだめだという考えを持っているのに対して、北朝鮮では、まだ金日成崇拝というか、労働党支配、いわばレジティマシー（正当性）が崩れていないという感じがします。あの国は、チュチェ思想という非常に特殊な唯心論の国、いわば宗教国家に近い社会主義国です。ですから、特殊な金日成崇拝、金日成信仰が二千万人の心を抑え、みんなまだ催眠術にかかっています。私が北朝鮮に行ったときにも、向こうの指導者は、自分たちは金日成を神様みたいに崇めているといっていました。

ただし北朝鮮の場合は、サクセッション、つまり権力継承が大問題だと思います。世代交代がうまくいくかどうかです。私は、少し突飛な言い方ですが、北朝鮮の権力継承における台湾化ということを考えています。つまり、台湾も今から二、三十年前は蔣介石独裁体制でした。それを自分の息子の蔣経国に渡し、やがていまの李登輝体制に移行しました。独裁体制から権威主義体制、そして民主体制という政治的発展をしたわけです。それは経済発展ともつながっています。

北朝鮮が生き延びるとすれば、北朝鮮のある種の台湾化、言い換えればソフトランディングが必要になるのではないかということです。ただ、蔣経国というのはきわめて大きな存在でしたけれども、金正日書記がはたして蔣経国に匹敵するような権威と能力を持っているのか。そこがまだはっきりわかりません。もしサクセッションがうまくいかなければ、北朝鮮も内部から崩れていくでしょう。

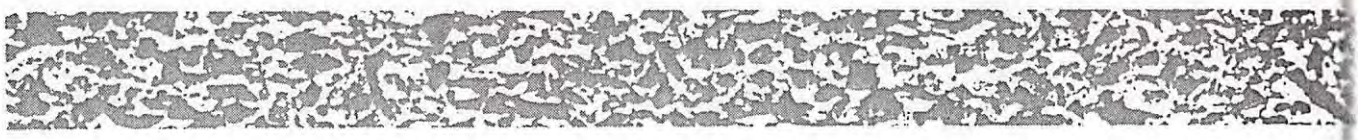
そして最後にベトナムは、私は三カ国のなかではもっとも早く脱社会主義の方向へ行くと考えます。まずひとつに、ベトナムに華人社会があり、華僑がたくさんいます。もともと東南アジアの華僑社会との結びつきが非常に強かった。するとその方向から華人経済優先の社会に変容していくと考えられます。すでに台湾とベトナムの経済関係も進んでいて、九一年の秋には台湾の貿易事務所がハノイにできました。ベトナムはやはり物資がありませんから、台湾との関係を欲しているのです。

もう一つは、カンボジア問題。ヘン・サムリン政権を実際に支えている人民革命党が、一党独裁体制の看板を下ろしました。去る十月中旬の臨時党大会で、複数政党制、自由民主主義、市場経済導入に踏み切り、党名からも「革命」という言葉を取ってしまいました。これはカンボジア和平が近づき、インドシナ半島がようやく治まりつつあることとも関連していますが、人民革命党はカンボジアにおいて、ベトナムに全面的に支援されてきた政党です。そこが社会主義の旗を降ろしてしまった。ということは、近い将来のベトナムの変化を予測させると見ていいでしょう。

いずれにしても、九〇年代のポスト冷戦時代のアジアは、冷戦が終わったから問題がなくなるという単純なものではありません。これら三つの国がどういう道筋をたどるか。その過程がうまく進まなければ、ソ連やユーゴのようなエスニシティー（民族性）の問題が、とくに中国あたりで起こってくると思われます。ほかに台湾独立の動きが台湾野党のなかにあり、これも注目すべきところです。

要するに、冷戦構造が解体すると、ある種のタガがゆるみ、本来の姿が噴出するわけです。同時に、それぞれの民衆が新しいアイデンティティーを持ちはじめます。たとえば、今まではソ連という国に治められていたけれども、自分たちはウクライナ人だ、グルジア人だと。

台湾でもそうなる可能性があります。香港



もそうです。香港返還は九七年七月ですが、最近の立法評議会選挙では民主派が圧倒的な勝利を治めてしまいました。考えてみると、香港返還はイギリスと中国、サッチャーさんと鄧小平さんが、香港人の民意を問うことなく決めたことです。そういう国際的決着そのものが問われてきているのです。エスニシティーの問題は、力関係によって決められた国境の変更を求める、国民国家のあり方の変更を求めるという下からの運動です。これからはそういう問題が、アジアでも大きな潮流のひとつになるでしょう。

このように、われわれが冷戦時代に考えた構造とは違ったものが、いま急速に表れてきています。そのなかで非常に興味深いのは、地域間の交流が、国家の枠組みを超えて行われていることです。国際社会の大きな政治や国連外交とは違ったところで、ある種の小さな外交が進んでいます。

たとえば、さきほどの台湾住民の中国訪問にしても、国連や国際政治の動きとは関係なく、みんなどんどん大陸へ行っています。ハノイの台湾事務所にしても、公の国際政治の外交レベルの話ではありません。ロシア共和国と台湾の交流も進められています。こうした動きは韓国でも北朝鮮でも香港でも始まりつつあります。東アジア全域で新しい地域レベルの国際関係ができつつあるのです。

ひるがえって、日本外交は地域の問題をほとんど考えに入れていません。日本はある意味で成り上がり者の側面があって、権威に弱いようです。何かというと、国連の安保理やPK●（国連平和維持活動）といった大がかりな舞台で国際政治を片づけようとする。大国志向が強く、日中関係や米中関係、中ソ関係などの大きな政治に関心を払い、派手に共同声明を発表できるような外交をめざします。

しかしたとえば、来る九二年九月で日中国交正常化二十年です。二十年前には台湾はなくなるとまでいわれたのに、いまや貿易、経済の力は台湾のほうが中国よりも大きい。その台湾と、中国を刺激しないで日本外交がどううまく調整していくかという大きな課題が、すでに目の前に横たわっているのです。

そういう意味では、中国、香港、台湾が参加して韓国で開かれた去る十一月中旬のAPEC（アジア太平洋経済協力閣僚会議）は、新しい時代を予感させます。香港や台湾抜きに今のアジア情勢を語れないことをよく承知している韓国が、会議の実現に力を尽くしたのです。

政治のリーダーはまだ早い

日本のアジアでのリーダーシップがしばしば議論されますが、経済力があるからリーダーにならなければならないということはありません。経済力があるということ自体がリーダーシップを持っているわけですから、さらに政治力をもつことについては、もっと禁欲的でいいのではないかと思います。

私は先年、こういう経験をしました。

香港の将来に関する国際会議に出席したときのことです。最後の総括討論で、香港と中国、香港とアメリカ、香港とカナダ、あるいは香港とオーストラリアという話題が出るのに、日本が登場しません。私は若干異議を申し立てました。街を歩けば日本製品があふれ、香港への投資は今やアメリカを抜いて日本が第一位である、日本との関係を抜きに香港の将来は考えられないのではないか、と。

香港の人たちの答えはこうでした。

「日本は経済大国である。それは見ればすぐにわかることだ。日本はそういう国であればいい。しかし香港の将来というようなアジアの国際政治の基本的な方向を決める場に、顔を出してほしくない」

私は日本人として心外でした。しかし考えてみると香港は反日感情の強い地域です。また香港に限らずアジアには、日本には経済的な貢献は期待しているし、援助もしてほしいが、だからといって、日本が国際政治の枠組みでリーダーシップをとられては困るという意識も根づよいのです。

日本がアジアで過去に誤りをおかしたから頭を下げろと主張するつもりはありませんが、日本がかつてアジアに対して大変な攪乱者であったことは歴史的な事実です。アジアの国々に土足で入っていったわけです。あれからまだ半世紀もたっていません。五十年前、日本はアジアでどういうことをしたのか、どういう立場にあったのかを、もっと謙虚に振り返ることがまだ当分、必要です。

そして私は、まず地域レベルの交流を提言したいのです。小さな単位の、リージョナルな国際政治をきちんと遂行していって初めて、日本はアジア地域の政治的リーダーシップが担えるようになるのではないかという思いがします。それが、本当の意味での国際的な立場に立つということではないでしょうか。

月刊 Asahi
1992.1 CONTENTS 目次

●アートディレクション＝熊沢正人（パワーハウス）
●レイアウト＝中沢清夫・栄永智恵・鎮美佐・三村彰・兼子真奈美
＋デザインオフィスZOO
©朝日新聞社 1991年 本誌掲載記事の無断転載を禁じます

●ティータイムは休載しました

第1特集 さらば生活貧国

〔PART1〕徹底データで納得！ '92年家族の決意

父の決意「家を売って、老後は日本脱出」 24
母の決意「エゴを捨て、エゴに生きます」 26
祖母の決意「寝たきり拒否へ、老人ホームのお手伝い」 28
長女の決意「息子を保育園に入れ、派遣社員にとらばーゆ」 30
その夫の決意「残業と接待拒否、一カ月の夏休みを」 32
長男の決意「基礎研究あきらめ、高校教師で後進指導」 34
姪の決意「できない子をヒイキするワルい教師に」 36

〔PART2〕'92年日本の選択

払うべき犠牲は払っていこう 天谷直弘 38
戦後の初心忘るべからず 伊東光晴 40
コメにこだわり成熟をめざせ 井上ひさし 43
国家の枠組み超えた外交を 中嶋嶺雄 46

本山―「学会」経済戦争の内幕
〝破門された〟のは日蓮正宗だ 溝口 敦 49

ラグビー・ワールドカップ初勝利
〝宿沢ジャパン〟の危機管理 宿沢広朗 52

岸 恵子の〈ヨーロッパ発〉不思議の国の蟻巣（アリス）❷ 57

中国でも共産主義は死んだ 方励之 60

第2特集 誕生の記憶

三島由紀夫が見た「産湯の盥のふちの光り」 太田雅子 66
アメリカがリードする「出生体験」の心理学 岡野守也 128
少産時代に栄える胎教ビジネス 熊谷博子 132

136 127

表紙の時計は「ジョン・レノン ウオッチ」。文字盤にはジョン自身が描いたイラストが使われている。没後10年目の1990年に発売された。25万円（協力＝服部セイコー）

個人秘書が初めて明かす **ジョン・レノン最後の日々** 文＝F・シーマン 8

マレーシア王家の華燭の典 **世紀のロイヤル・ウエディング** 写真＝内山澄夫 M・マーガレット 文＝小田豊二 103

21世紀への提言❶ **「世界平和のために」** 横田喜三郎 84

神話と伝説の考古学 古代史を歩いて考える⓫ **国生み物語と吉備の児島** 森 浩一 78

新連載 中年クライシス❶ **人生の四季** 河合隼雄 142

文明と裸体 日本人はだかのつきあい❶ **芸術という名の権力** 井上章一 196

●エッセー／コラム

群ようこのビデオ探検❶『サウンド・オブ・ミュージック』 100

新連載 単身赴任的達人❶ 渡辺昌治さん（スペースワールド人事部長） 210

◆今月のニクいやつ 千昌夫 中野 翠 23

◆インサイド・アイ 永田町・霞が関 朝倉洋一／山内三郎 70

◆新聞考 時代錯誤も甚だしい「本音」意識の復活 太宰 信 111

◆タイムトンネル・ざ・ぐるめ⑳ 組重 奥村彪生 174

◆杉原輝雄のプロゴルフ「'91熱年戦記」⓫ シニアの意地を雨中戦 179

◆東京エスニック法廷❽ 法廷で息子を抱きしめ「わが子は無実」と父 柴田弘子 182

◆TVイン・アメリカ❹ ホームドラマの時代 竹内 葵 188

◆読者フォーラム 190

◆懸賞つきマトリックス・パズル❶ 会社への道 192

短期連載 ニッポン解体屋繁盛記❷ 生方幸夫 148

翔べ！白血病の息子よ❹ 橋本明子 184

連載 昭和陸軍の興亡 ◎第十六回 実松・海外駐在武官の回想録 保阪正康 92

小説 世界が崩壊した日【最終回】 R・セイセンバエフ 154

独占手記 たか子 MY WAY❷ 人が人を呼び、会が会を生む 土井たか子 72

●月刊図書館

三酔人書国悠遊〈巧智のひと 司馬遼太郎〉 112

鶴橋孝「宮崎市定全集」誠

新刊近刊 D・ルバースタム「ネクスト・センチュリー」、K・オウレッタ「スリー・ブラインド・マイス」ほか

井狩春男の取次雑記

●情報ポケット 120

●論叢

AIDS WARと人類「衰亡」の危機 宗像恒次 162

日本映画なんか、もういらない 浜野保樹 166

新連載 日本型民主主義——朝鮮の構図❶ 悪魔との握手 富森叡児 170

新連載❶ スポーツどきどき 大相撲◆私が藤島親方だったなら 文＝川崎 徹 写真＝天野充佳 202

名画とあそぶ法⑳ ヴァチカン美術館●ヴァチカン市国 江國 滋 206